朝日新聞　2014年(平成26年)7月1日　火曜日

診察室から@埼玉　教育現場と連携

担任の先生と共通理解を

今回も診察室の一コマを再現してみます。

小学6年のA君。母親に最近の様子を聞くと、笑顔で「授業中も先生の話を聞けるし、ノートも書いているので、先生からも褒めてもらえるようです」。A君もそれを聞いてまんざらでもない表情を見せました。

A君を初めて診察したのは小1の夏でした。多動で落ち着きがなく、興味のあることにしか集中できない子でした。自分の思い通りにならないと怒り、床に寝そべって2時間以上泣きやまないこともありました。母親は「わがままな子」だと思って、A君のことを怒鳴ったり、たたいたりしていたようです。

幼稚園時代は、先生や園を巡回指導してくれる専門の先生に個別対応をしてもらい、無事卒園できました。しかし就学後はほとんど席に座っていられず、友達にちょっかいを出したり、担任から注意を受けると教室から出て行ったりするようになりました。担任だけではA君を押さえきれず、2～3人の先生で押さえて教室へ戻そうとすると大暴れ。学校側も困り果てて両親へ連絡し、当科受診となったのでした。

発達心理外来で発達査定を行い、「多動性を伴う知的遅れのない高機能自閉症スペクトラム障害」と診断しました。もちろん、診断して終わりでなく、今後の対応方法を両親と一緒に考えました。その方法とは、子どもがこなしやすい課題を設定し、できたらしっかり評価する、ということを積み上げていくことです。

家庭だけではうまくいかないので、担任の先生にも病院に来てもらい、共通の理解を持ってもらうようにしました。多動性をコントロールする薬を内服したこともありますが、できる課題が増えるにつれてA君は自信をつけ、難しい課題にも積極的にチャレンジするようになりました。そうした積み重ねにより、冒頭にあるような言葉が母親からも出てくるようになったのです。幼児期から問題を抱えるこうした子どもたちの対応には、教育現場の先生との連携が欠かせないことを実感させられた事例です。

（独協医大越谷病院子どものこころ診療センター教授・作田亮一）